〔D 年〕公現後第 3 主日(2024 年 1 月 21 日)

【旧約聖書日課】出エジプト記　33章12～23節

12モーセは主に言った。「あなたはわたしに、『この民を率いて上れ』と言われました。しかし、わたしと共に遣わされる者をお示しになりません。あなたは、また、『わたしはあなたを名指しで選んだ。わたしはあなたに好意を示す』と言われました。13お願いです。もしあなたがわたしに御好意を示してくださるのでしたら、どうか今、あなたの道をお示しください。そうすれば、わたしはどのようにして、あなたがわたしに御好意を示してくださるか知りうるでしょう。どうか、この国民があなたの民であることも目にお留めください。」14主が、「わたしが自ら同行し、あなたに安息を与えよう」と言われると、15モーセは主に言った。「もし、あなた御自身が行ってくださらないのなら、わたしたちをここから上らせないでください。16一体何によって、わたしとあなたの民に御好意を示してくださることが分かるでしょうか。あなたがわたしたちと共に行ってくださることによってではありませんか。そうすれば、わたしとあなたの民は、地上のすべての民と異なる特別なものとなるでしょう。」17主はモーセに言われた。「わたしは、あなたのこの願いもかなえよう。わたしはあなたに好意を示し、あなたを名指しで選んだからである。」

18モーセが、「どうか、あなたの栄光をお示しください」と言うと、19主は言われた。「わたしはあなたの前にすべてのわたしの善い賜物を通らせ、あなたの前に主という名を宣言する。わたしは恵もうとする者を恵み、憐れもうとする者を憐れむ。」20また言われた。「あなたはわたしの顔を見ることはできない。人はわたしを見て、なお生きていることはできないからである。」21更に、主は言われた。「見よ、一つの場所がわたしの傍らにある。あなたはその岩のそばに立ちなさい。22わが栄光が通り過ぎるとき、わたしはあなたをその岩の裂け目に入れ、わたしが通り過ぎるまで、わたしの手であなたを覆う。23わたしが手を離すとき、あなたはわたしの後ろを見るが、わたしの顔は見えない。」

【使徒書日課】ヨハネの手紙一　1章1～4節

1初めからあったもの、わたしたちが聞いたもの、目で見たもの、よく見て、手で触れたものを伝えます。すなわち、命の言について。――2この命は現れました。御父と共にあったが、わたしたちに現れたこの永遠の命を、わたしたちは見て、あなたがたに証しし、伝えるのです。――3わたしたちが見、また聞いたことを、あなたがたにも伝えるのは、あなたがたもわたしたちとの交わりを持つようになるためです。わたしたちの交わりは、御父と御子イエス・キリストとの交わりです。4わたしたちがこれらのことを書くのは、わたしたちの喜びが満ちあふれるようになるためです。

【福音書日課】ヨハネによる福音書　2章1～11節

1三日目に、ガリラヤのカナで婚礼があって、イエスの母がそこにいた。2イエスも、その弟子たちも婚礼に招かれた。3ぶどう酒が足りなくなったので、母がイエスに、「ぶどう酒がなくなりました」と言った。4イエスは母に言われた。「婦人よ、わたしとどんなかかわりがあるのです。わたしの時はまだ来ていません。」5しかし、母は召し使いたちに、「この人が何か言いつけたら、そのとおりにしてください」と言った。6そこには、ユダヤ人が清めに用いる石の水がめが六つ置いてあった。いずれも二ないし三メトレテス入りのものである。7イエスが、「水がめに水をいっぱい入れなさい」と言われると、召し使いたちは、かめの縁まで水を満たした。8イエスは、「さあ、それをくんで宴会の世話役のところへ持って行きなさい」と言われた。召し使いたちは運んで行った。9世話役はぶどう酒に変わった水の味見をした。このぶどう酒がどこから来たのか、水をくんだ召し使いたちは知っていたが、世話役は知らなかったので、花婿を呼んで、10言った。「だれでも初めに良いぶどう酒を出し、酔いがまわったころに劣ったものを出すものですが、あなたは良いぶどう酒を今まで取って置かれました。」11イエスは、この最初のしるしをガリラヤのカナで行って、その栄光を現された。それで、弟子たちはイエスを信じた。

「聖書協会共同訳」（2018年版）読み比べ

出エジプト記　33章12～23節

12モーセは主に言った。「ご覧ください。あなた
は私に、『この民を導き上れ』と仰せになりま
した。しかし、私と共に遣わされる者は示されてい
ません。しかもあなたは、『私はあなたを名指し
で選んだ。私の目に適う』と仰せになりました。
13もしもあなたの目に適うのなら、どうか今、あな
たを知ることができるように、私にあなたの道を
お示しください。そうすれば、私はあなたを知る
ことができ、私はあなたの目に適うでしょう。御
覧ください。この国民はあなたの民なのです。」
14すると主は言われた。「私自身が共に歩み、あな
たに安息を与える。」15モーセは言った。「あなた
自身が共に歩んでくださらないのなら、私たちを
ここから上らせないでください。16私とあなたの
民があなたの目に適っていることは、何によって
分かるのでしょうか。あなたが私たちと共に歩ん
でくださることによってではありませんか。そう
すれば、私とあなたの民は、地上のすべての民の
うちから特別に選ばれた者となるでしょう。」
17そこで、主はモーセに言われた。「あなたの言
ったそのことも行う。あなたは私の目に適い、私
は名指しであなたを選んだのだから。」18モーセが、
「どうかあなたの栄光を私にお示しください」と
言うと、19主は言われた。「私は良いものすべてを
あなたの前に通らせ、あなたの前で主の名によっ
て宣言する。私は恵もうとする者を恵み、憐れも
うとする者を憐れむ。」20さらに言われた。「あな
たは私の顔を見ることはできない。人は私を見て、
なお生きていることはできないからである。」21主
は言われた。「私の傍らに一つの場所がある。あ
なたはその岩の上に立ちなさい。22私の栄光が通
るとき、あなたを岩の裂け目に入れて、私が通り
過ぎるまで、私の手であなたの上を覆う。23私が手
を離すとき、あなたは私の後ろを見るが、私の顔
を目にすることはない。」

ヨハネの手紙一　1章1～4節

1初めからあったもの、私たちが聞いたもの、目
で見たもの、よく見て、手で触れたもの、すなわ
ち、命の言について。――2この命は現れました。
御父と共にあったが、私たちに現れたこの永遠の
命を、私たちは見て、あなたがたに証しし、告げ
知らせるのです。――3私たちが見たもの、聞いた
ものを、あなたがたにも告げ知らせるのは、あな
たがたも私たちとの交わりを持つようになるため
です。私たちの交わりとは、御父と御子イエス・
キリストとの交わりです。4私たちがこれらのこと
を書くのは、私たちの喜びが満ち溢れるようにな
るためです。

ヨハネによる福音書　2章1～11節

1三日目に、ガリラヤのカナで婚礼があって、イ
エスの母がそこにいた。2イエスとその弟子たちも
婚礼に招かれた。3ぶどう酒がなくなってしまった
とき、母がイエスに、「ぶどう酒がありません」
と言った。4イエスは母に言われた。「女よ、私と
どんな関わりがあるのです。私の時はまだ来てい
ません。」5母は召し使いたちに、「この方が言い
つけるとおりにしてください」と言った。6そこに
は、ユダヤ人が清めに用いる石の水がめが六つ置
いてあった。いずれも二ないし三メトレテス入り
のものである。7イエスが、「水がめに水をいっぱ
い入れなさい」と言われると、召し使いたちは、
かめの縁まで水を満たした。8イエスは、「さあ、
それを汲んで、宴会の世話役のところへ持って行
きなさい」と言われた。召し使いたちは運んで行
った。9世話役が水をなめてみると、ぶどう酒に変
わっていた。それがどこから来たものなのか、分
からなかったので――――水を汲んだ召し使いたち
は知っていたが――――、世話役は花婿を呼んで、
10言った。「誰でも初めに良いぶどう酒を出し、酔
いが回った頃に劣ったものを出すものですが、あ
なたは良いぶどう酒を今まで取っておかれまし
た。」11イエスは、この最初のしるしをガリラヤの
カナで行って、その栄光を現された。それで、弟
子たちはイエスを信じた。

黙想のためのノート

次主日の教会暦と聖書日課

・1 月 21 日「公現後第 3 主日」の日課主題は「宣教の開始」。

・旧約聖書日課は、「出エジプト記」から、「金の雄牛事件」の過ちを嘆く民のためにとりなすモーセと主の対話を描く逸話箇所。使徒書日課は、「ヨハネの手紙一」から、冒頭導入句の箇所。福音書日課は、「ヨハネによる福音書」から、「カナの婚礼」の逸話箇所。

旧約日課（出エジプト 33 章より）

・「出エジプト記」は、ユダヤ正典（ヘブライ語聖書）「律法」の第二巻で、「申命記」まで続く「モーセ物語」の第一の書。「モーセ誕生譚」から始まり、「モーセ召命譚」、「十の災いの逸話」、「過越とエジプトからの出発」、「荒れ野の旅」、「シナイ契約」、「幕屋建設と金の雄牛事件」と展開する。正典「律法」中の四巻の文書で展開する「モーセ物語」は、モーセの誕生から死までを扱っており、一応は物語として完結する体裁となっているが、文学作品としての一体性に欠け、その成り立ちについて長く議論が続けられている。議論を単純化すると、「申命記」の大部分とそれ以外の各書で展開されるものを分け、両者を異なる意図に基づいて編集された「物語」と解し、それが最終的な正典編纂において一体化された、とするような仮説が考えられてきた。また、「創世記」同様の資料仮説（J 資料、E 資料、P 資料など）に基づく分析もされてきた。しかし、諸説入り乱れており、正典「律法」成立過程の詳細に関する学者間の合意は形成されていない。ただし、正典「律法」の編纂完成の時期は、前 6 世紀のバビロン捕囚期以後、ペルシア支配時代の前半 100 年ほどの時代であると推認することにおいては、大きな異論はない。つまり、ユダ・イスラエルの民の歴史において、大国間の覇権争いの狭間で諸民族に緊張と混乱の連続を強いてきた長い時代を終結させ、事実上初めてオリエント世界全体を支配下に治めたペルシア帝国の現出という、まったく新しい状況の中で、自治を許された「ユダの民」としてのアイデンティティを基礎づけるための文書として、「律法」および「預言者」と呼ばれるようになる「正典」が編纂され、現行で見る旧約文書とほぼ一致する文書集が完成された、ということである。その際、この事業の中心となったユダ王国の末裔であるところの人々は、旧北王国（イスラエル）を含むより広範な民族共同体として再興することを構想し、「ユダ・イスラエル」の共通のルーツとして「モーセ物語」を中心に据えたと考えられる。

・日課箇所は、「幕屋建設と金の雄牛事件」（25～40 章）の中に置かれたモーセと主の対話場面で、金の雄牛事件をきっかけに臨在の幕屋が設けられるようになったことが記されたのに続いておかれており、後段 34:3 までを含めて臨在の幕屋におけるモーセと主の対話として描かれていると考えられる。

・モーセと主の対話において問題とされているのは、「金の雄牛事件」によって主を裏切った形になった民の今後の旅に、主がなお同行してくださるのかどうか、ということである。前段 33:1 以下では、モーセに導かれて約束の地に向かうことになる民に対して、主が一旦は突き放しながら、民の嘆きを見て条件付きで考え直す可能性を提示されたこととなっている。主（神）の不在問題は、根源的には「神観」の問題である。モーセを召して民をエジプトから導き出された神（主）は、ここまでの物語において、「シナイ山（ホレブの神の山）」に臨在される神として描かれてきたとおり、土地（山）と結びついていたが、「出エジプト記」は、神が指示して建設される「幕屋」を「シナイ山」に変わる「神の臨在の場」とし、土地に縛られない「神観」に移行させている。同時に、「金の雄牛事件」の逸話が暗示しているように、土地に縛られない「神」は移動可能な何らかの「像」あるいは「乗り物」によって臨在が示されるという古代オリエント世界で広く知られる「神観」に基づいて、「金の雄牛」に変わる神の臨在の象徴として提示されるのが、シナイ山でモーセに授与された「掟の板」である。「掟の板」が「神の箱」に収められて「幕屋」に安置されることではじめて、「幕屋」は「臨在の幕屋」としての機能を十全に果たすものとみなされる。

使徒書日課（Ⅰヨハネ 1 章）

・「ヨハネの手紙一」は、「ヨハネ福音書」および「手紙二」「手紙三」と共に「ヨハネ文書」として位置づけられる書簡文書。「ヨハネ福音書」を生み出したとされる「ヨハネの共同体」の指導者によって、「福音書」の教えを補完し、また解釈の軌道修正をさせるために著されたと考えられている。ただし、「ヨハネ文書」のどの文書にも、名前も含めた著者についての情報はほとんど何も明示されておらず、「ヨハネの共同体」との関係は、2 世紀まで遡る教会伝承に基づく。

・日課箇所は、本書簡の冒頭導入部。本書は、書簡文書として解釈されてきたが、「パウロ書簡」などに見られるような書簡としての定型的な書式を欠いており、差出人名、宛名、挨拶などが無い。それらが最初から無いのか、後で削除されたのかはわからない。この文書が自分たちの教会共同体内で回覧されることだけを目的としたものであれば、そのような定型書式を欠いていても不自然ではない。

・1 節「初めから（アプ・ァルケース）」は、本書簡と「手紙二」で繰り返し用いられる（Ⅰヨハ 2:7,13,14,24、3:8,11、Ⅱヨハ 5,6）。「初め（アルケー）」の語は、「ヨハネ福音書」でも 8 例がみられるが、必ずしも「初めから」という用法ではない。この語に表されているように、本書簡では、「ヨハネの共同体」が最初から一貫して教えていたことが何であったのかを確認し、そこから外れないよう教えることを、大きな目的としている。具体的には、それは「命の言」として提示されている。これらは、「ヨハネ福音書」1:1~4 に対応して解されうる。

・3 節「交わり(コイノーニア)」は、「パウロ書簡集」で特異的に用いられる語で(新約 19 例中 13 例)、「ヨハネ福音書」を含む四福音書に用例がみられないが、本書簡では4例がみられる(1:3,6,7。3節は2用例)。「ヨハネの共同体」は、ユダヤ・サマリア・ガリラヤ地方で活動した後にエフェソに移住したとされており、二年ほどエフェソを拠点として活動したパウロとの接点や相互の影響の可能性が考えられる。本書簡の用例では、3 節でも 6～7 節でも、人間同士の関係と人と神との関係の両者を「交わり」の語で敢えて並べて示しており、「パウロ書簡」での用法とも一致する。パウロの場合は、洗礼によって「キリストとの交わり」に入れられた者が、「キリストの体」と呼びうる相互の「交わり」としての「教会」に参与させられている、という共同体論を展開している(Ⅰコリなど参照)。「ヨハネ福音書」には、ときに弟子と御子イエスとの霊的な関係性が強調されすぎる場合が見られるが、それに対して、本書簡では、パウロが強調するような弟子同士の関係性を神との関係性の反映と見て重視する考えを、当然のこととして確認しようとしているのかもしれない。実際、本書簡の後半では、「神の愛」に基づいて「兄弟同士が互いに愛し合うこと」を当然のこととして確認している。

福音書日課(ヨハネ 2 章より)

・日課箇所は、「カナの婚礼」として知られる逸話箇所。本福音書で注釈的に重要な逸話に付される「しるし(セーメイオン)」として最初に置かれたもの(11 節)。この逸話は、共観福音書では伝えられていない本福音書独自の伝承。「カナ」がどこの町であったか確実なことは分かっていないが、主イエスだけでなく母や弟子たちも婚礼に招かれており、ガリラヤ地方の彼らと縁の深い町と想定される(ように設定されている)。共観福音書は、主イエスの母や兄弟たちがどのように主イエスの活動に同行するようになったのか示唆する逸話を伝えているが、本福音書は日課箇所に続く 12 節で、同様のことを示唆している。しかし、主イエスの兄弟たちに関しては、主イエスに対して批判的な姿勢でもあったことが強調されている(7 章)。ここでは「母」だけが特に登場させられているが、これは、教会伝承で「ヨハネの教会共同体」が「母マリア」の晩年の世話をし看取ったとされることと関係するのかもしれない(19:25~27 の逸話も参照)。

・4 節「婦人よ、わたしとどんなかかわりがあるのですか(ティ・エモイ・カイ・ソイ、グーナイ)」は、「マルコ」および「ルカ」が「悪霊につかれたゲラサ人の逸話」の中で悪霊につかれたゲラサ人に語らせている「いと高き神の子イエス、かまわないでくれ」(マルコ 5:7、ルカ 8:28)と同じ表現。直訳すれば「何がわたしとあなたに(あるのか)」となる慣用表現で、自分と相手の関りを否定する表現と解されるが、直訳的に解釈すれば、相手との関係性を問う言い回しとも解されうる。「婦人よ、わたしとあなたはどのような関係であるべきか」と。

・6 節ユダヤ人の「清め(カタァリスモス)」については、主イエスとユダヤ人の間ではなく、洗礼者ヨハネの弟子たちとユダヤ人たちとの間で論争があったと、本福音書は付言している(3:25)。その論争がどのようなものであったのかは不明であるが、「カナの婚礼」の出来事が、その論争に対する主イエスの示される応答として位置づけられているのであろう。主イエスの与える「良いぶどう酒」=「主イエスの血」? の大盤振る舞いが「清め」をもたらす、ということか。

来週の誕生日 (1 月 21 日～27 日)

。

主日礼拝の讃美歌から

・21-127 **番「み恵みあふれる」**は、19 世紀フィンランド・ルーテル教会信徒でフィンランド文学の教授クローンが自らも携わった讃美歌集に収録した讃美歌。曲は、フィンランドの伝統旋律から採られた。WCC の 1974 年版讃美歌集に採用されて広まった。

・21-286 **番「ほめたたえよ、われらの主を」**は、19 世紀英国教会司祭ハイド・ビードンがヨハネ 2:1~11 に基づいて作詞。曲は、18 世紀英国の盲目のオルガニスト・ロックハートが、病院チャペルオルガニストを務めていた際に、病院用歌集のために作曲したもの。

・21-196 **番「主のうちにこそ」**は、現代韓国の讃美歌で、牧師・朴聖文が作詞、メソジスト派牧師・呉小雲が作曲した。

21-127「み恵みあふれる」

Herrasta Veissa Kieleni

English Translation

O sing my soul, your Maker's praise

1. O sing my soul, your Maker's praise / In grateful hymns ascending; / Whose steadfast love has crowned your days / With heav'nly gifts un ending. / I sought the Lord, He heard my cry; / His holy angels hover nigh / The tents of those who love Him.
2. The Lord is good to those who seek / His face in time of sorrow, / Providing comfort to the weak / And grace for each tomorrow. / Though grief may tarry for a night, / The morn shall break in joy and light / With blessings from His presence.
3. The Lord will turn His face in peace / When troubled souls draw near Him; / His loving kindness shall not cease / To those who trust and fear Him. / Our God will not forsake His own; / Eternal is His heav'nly throne;
   His kingdom stands forever.

21-286「ほめたたえよ、われらの主を」

All praise to you, O Lord

1. All praise to you, O Lord, / who by your mighty power / did manifest your glory forth / in Cana's marriage hour.
2. You speak, and it is done; / obedient to your word, / the water reddening into wine / proclaims the present Lord.
3. Oh, may this grace be ours: / in you always to live / and drink of those refreshing streams / which you alone can give.
4. So, led from strength to strength, / grant us, O Lord, to see / the marriage supper of the Lamb, / the great epiphany.